

## 高橋良当君から伺った「菊地先生との交流内容」

1. 菊地先生と我々とは 10 歳程の差であろうか。私（高橋）は高校時代に菊地先生に特段親しく教えを請うていたということはない。一度くらいは職員室で質問したことがある程度だ。
2. 私は小学 5 年あたりから、西千葉の京成線路沿いのアパート（春日荘）で高校まで下宿生活を送り、浪人 2 年目は船橋で下宿して予備校に通った。
3. 菊地先生は稲毛駅から 10 分程度の、澱粉工場の下にある 2 階建てアパートの 1 階に住まわれていた。その後、船橋市若松の公団住宅に移転されて船橋高の定時制に長く勤められていた。全ての部屋、風呂、トイレの中までが本で埋まっていたのはこの公団住宅である。
4. 私は高卒後、2 浪して信州大学医学部に入ったが、浪人時代は病気で千葉大に入院したりした。この時代に親に相談できない内面的なことで菊地先生に相談に行ったのが先生との長い交流の始まりである。親に相談できないこととは端的に言えば女性問題で、先生の答えは当たらずとも遠からずであったが、相談できることが有難かった。
5. 先生のアパートに泊まったことがある。その時の朝ご飯は先生が小さな電気釜で炊かれ、魚の缶詰を開けられて海苔がついたような食事だった。先生は海苔が好きだった。そのときの朝ご飯は何故かとても美味しかった鮮明な記憶がある。先生と呼ばずに菊地さんと言いなさいと指示されたのもその頃である。
6. 大学中も何度か相談に出向く。先生から「読みなさい」という本を紹介して頂き、夏休み中は涼しい松本で 6 年間読み耽った。漱石、鷗外、藤村、谷崎、川端、三島などだったと記憶している。
7. 先生とは 2 度旅行したことがある。一度は仙台だ。仙台の北、泉区に先生のお姉さんのご夫婦が住んでおられた。瑞巖寺の山門で写真を撮り、夜は郊外の秋保温泉にお姉さん夫婦と共に泊まったと思うが殆ど記憶がない。お姉様の姓名やご住所なども知らないが、先生がお亡くなりになった後、お姉様のご葬儀などをされたのだと思う。
8. もう一度は先生と小浜に旅行した。夏の午後で暑かった。誰もいない小浜の海で先生から勧められるまま私は泳いだ。それを先生は岸辺でぼーっと眺めていた。ああ、トニオクレーゲルの世界だなと思った。その晩、小浜の宿で先生と一緒に風呂に入った。左わき腹に 10cm 程のケロイド様の傷跡があり、小児期の火傷か外傷跡であろうが、トラウマとして先生はかなり気にされていたようだ。こういうのも生涯ご結婚されなかった一因だったかも知れない。
9. 私は大学を卒業してから福岡の九大心療内科にて 2 年間研修し、千葉の八千代中央病院（今は廃院）に 1 年出張してから 29 歳で東京女子医大に移った。先生とは年 2~3 回から数年に 1 回程度お会いしていた 30 年近いお付き合いで、連絡は電話だったと思

うが、私からか先生からかはよく覚えていない。

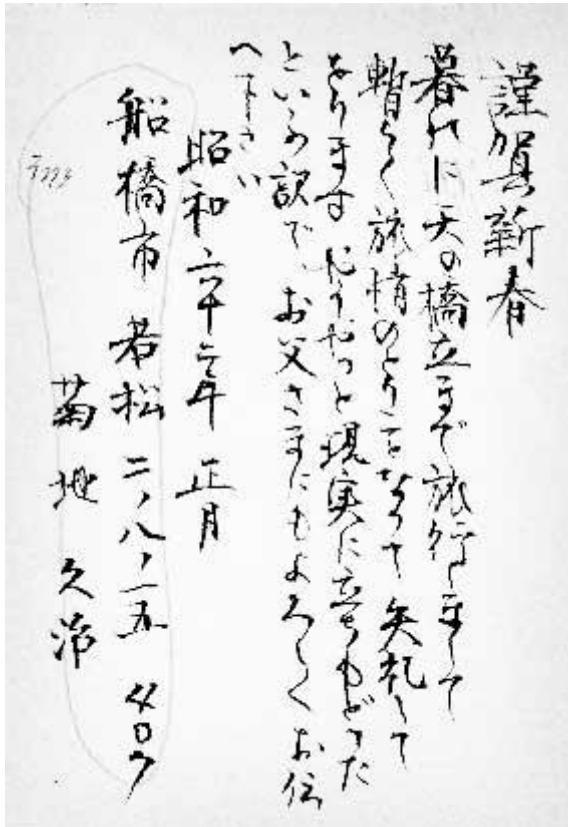
10. 私の最初の結婚式の時、来賓として参列して頂いた。これが、その時の先生のお写真である。(高校時代とイメージが違うではないかと伊藤が述べると) そう、高校時代のイメージとは違うが、私の菊地先生のイメージはこちらの写真の方だ。雰囲気は勝新太郎の座頭市に似ており、私はその座頭市の渋い生き様が好きだった。



高橋君結婚式での菊地先生

修学旅行での先生

11. 昭和61年、私の実家(成東;現在の山武市)に来てもらったことがある。それは私の父が先生にお見合いをセットした為だ。父は教師で、その人脈から良い人を紹介したのだと思う。しかし、見合いは先生の方から断られる。その理由を「いい人だが、胸がぺちゃんこで」と私に話された。この時のお礼にも言及しているのがこの年賀状である。後にも先にも先生と女性との関係を私はこれしか知らない。恐らく、異性よりは若い男性、丸顔の男の子が好きだったように記憶している。



昭和62年の先生から高橋君への年賀状、前年に高橋君の御父上が尽力されたお見合いへのお礼が書かれている。

12. それから数年後、先生は船堀の自宅にも来られて、私と娘の写真を撮られた。私はJALの半被を着せられ後方から撮られ、娘も視線を上に向けさせて撮影される。先生の美意識なのだろう。





いずれも菊地先生撮影の写真。こういう構図が先生の美意識であったのだ。

- 1 3. 先生は岩手県遠野から山奥に入った処で生まれ、東北大文学部の出身、静岡の高校を経て千葉高へ、さらに船橋高校の夜間（定時制）で定年まで教えられていた。例の朗読も続けていたようだが、千葉高とは生徒のレベルが大部違うと漏らされた。ただ先生はご自分の生活パターン（夜、遅くまで呑んで遊んでという生活）に合っていたようで、朝の寝起き前の夢か現（うつ）か解らないときが何よりも心地良く、創作意欲も湧いて貴重だと話されていた。
- 1 4. 先生と会って飲みに行くのは新宿2丁目や新小岩などだ。先生はビールだけを呑まれ、余り食べないでおつまみを少しつまむ程度だ。そしてヘビースモーカー、いつも強烈なわかばを吸っておられた。私は酒に弱い方で専ら食べていた。
- 1 5. 先生はカラオケがお好きだった。大抵男歌的な演歌ものだが、ゲゲゲの鬼太郎の歌なども上機嫌で歌われた。先生は歌が大変上手で、途中で台詞が入ると例の情感たっぷりの声色をふんだんに出し、私はそういう先生がとても好きで喜んで聞いていた。
- 1 6. 新宿2丁目2階にあったオカマバーの帰り際、私が先に階段を降りて下で待っていた。上を見上げると、先生は若い男性店員と体を向き合い怪しげなことをされていた。丸顔の若い男性が好きなことは知っていたので驚きはしなかった。
- 1 7. 小説を書きたいとおっしゃって構想を話されたこともあるが覚えていない。評論は書かれており、出版社とも付き合いがあった。江戸文学が専門とのことで、一度評論を読まされて感想を聞かれたことがあった。答えるとフフンという感じであったが、正直な処、難解で良く解らなかった。
- 1 8. 自分以外にも菊地先生に相談に来る者がいると言われていたが、親が高校教員ということ以外具体的なことは知らない。
- 1 9. 先生は人目を気にされる方だ。年齢を重ねるにつれ、頭髪の薄いことも気にされていて、外出時には頭皮を黒く塗ったりされていた。

20. 先生は日本の作家では三島に憧れていたと思うが、三島のような貴族的な生活を指向したのではなく、生活とは無縁の研ぎすまされた純文学、死に至るまでの生の昂揚に強く惹かれていたようだ。三島と心中した森田への憧れと三島への羨望を漏らされていた。J.バタイユのエロチシズム（澁澤龍彦訳）、三島の憂国の世界である。
21. 亡くなられた時だが、当時は先生と数年お会いしていなかったと思う。平成12年だったか、12月の夜12時少し前くらい、水道橋警察から自宅に突然電話があり、親族の居場所などを聞かれた。親族としてお姉様が仙台におられること、船橋高定時制の教員であったことを伝えた。その後、警察からは連絡なく対処されたのだと思う。ヘビースモーカーであり、心筋梗塞ではなかろうか。
22. それ以降は全く関知していない。だからお墓がどこかもわからない。水道橋警察署に行けば、自分の名前も記された当時の記録はあると思うので尋ねてみたい。私にとって、その水道橋は何度も歩いている思い出の場所でもある。因果なものだ。